

長谷川 雪旦・雪塘（1/2）

～書画愛好の風をすすめた雪旦～

■長谷川 雪旦（はせがわ せったん）

1778－1843江戸時代後期の画家。

安永7年生まれ。長谷川雪堤の父。はじめ彫刻大工だったが、雪舟の画風を慕い、長谷川等伯に私淑して長谷川雪旦と名乗り画工となった。「江戸名所図会(ずえ)」「東都歳事記」の挿絵を描き好評を得た。晩年に法橋(ほっきょう)となった。天保(てんぽう)14年1月28日死去。66歳。江戸出身。姓は後藤。名は宗秀。通称は茂右衛門。別号に一陽庵、巖岳斎。

■長谷川 雪塘（はせがわ せつとう）

天保7～明治23年（1836～1890）

奥州の人、庄内藩松田稔左衛門の息子、安政3年20歳にして狩野永憙に就いて絵を学ぶ。慶応3年、雪堤の門人として唐津藩に仕え、ここで姓を長谷川と改めた。北宋画家に属し僧雪舟一長谷川雪旦一雷堤一雷塘の系譜、永麟と号した。廃藩後、唐津江川町に住み一般の求めに応じたので唐津界隈に遺作が多い。墓所は江川町松雲寺にあったが、昭和40年西宮市甲山霊園に移した。

（引用：佐賀県が生んだ幕末・明治の500人（福岡博著）佐賀新聞社より）

～2/2へつづく～

分野

文化

◎地図・写真・統計資料など



四季耕作図屏風(部分)雪旦
佐賀県立博物館所蔵

（『からつ歴史考』より）

◎引用・参考文献（出典）

- ◆佐賀県が生んだ幕末・明治の500人/福岡博 編（佐賀新聞社）
- ◆からつ歴史考（唐津市）
『教育と文化 1. 長谷川雪旦と唐津』平田寛 著
- ◆『末盧国』第1巻 39頁
- ◆『末盧国』第2巻 75頁
- ◆『末盧国』第2巻187頁
- ◆『末盧国』第2巻203頁

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

長谷川 雪旦・雪塘 (2/2)

～書画愛好の風をすすめた雪旦～

～1/2からつづく～

■からつ歴史考「教育と文化 1. 長谷川雪旦と唐津」平田寛 著より抜粋

雪旦のことは、森鷗外の「伊澤蘭軒」（岩波書店の森鷗外全集第17巻）その104、156にとりあげられていて、好事家でなくともその存在はひろく知られている。

それによると、雪旦は、名は宗秀、又巖嶽、一陽庵等の号があるとし、文政元年戊寅（1818）41才で、肥前国唐津の城主小笠原主殿頭長昌に聘せられて九州にいったと述べ、伊澤蘭軒は、送画師長谷川雪旦従駕之唐津と題する二つの七言絶句を製した、というのである。夏秋の頃であったという。

雪旦の来唐は、1人の絵師の単なる来唐を意味するのではなく、化政期の江戸文化の、それも趣味的に洗練された文化の来唐を意味するものであった。鷗外の「井澤蘭軒」に雪旦のことが記述されていることの意義は、その点にある。

唐津の諸家に所蔵される雪塘の作品は多数である。粗放なものが少なくなくて、師雪旦の洗練と謹密な画風とは異なるが、それでもその書画が19世紀の唐津のひとびとに好画の佳風を植えつけたことは多とすべきである。

雪塘は明治23年（1890）55才で歿したが、その居宅はいまの唐津市坊主町のあたりにあった。唐津市図書館の古絵図にみえる。

このように雪旦の来唐は、その画系を唐津にのこし、書画愛好の風をすすめたが、その愛好に尚古の風の存したことは、唐津の文化の歴史にとって喜ばしいことであった。

分野

文化

◎地図・写真・統計資料など



宮廷人物図(部分)雪塘
佐賀県立博物館所蔵

(『からつ歴史考』より)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆佐賀県が生んだ幕末・明治の500人/福岡博 編（佐賀新聞社）
- ◆からつ歴史考（唐津市）『教育と文化 1. 長谷川雪旦と唐津』平田寛 著
- ◆『末盧国』第1巻 39頁
- ◆『末盧国』第2巻 75頁
- ◆『末盧国』第2巻187頁
- ◆『末盧国』第2巻203頁

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html